

## ドラマチック木曾川 —新型コロナ禍での川上貞奴生誕150周年記念市民オペラ制作への挑戦—

藤田 敦子 (創作オペラ「貞奴」プロジェクト)



### ■はじめに

私たちの活動する岐阜県各務原市には、日本初の女優であり、世界的に活躍した川上貞奴が創建し、その霊廟がある寺院「貞照寺」(写真2。昭和8年創建当時は「金剛山桃光院貞照寺」、現在は「成田山貞照寺」と、そこへの参拝時に滞在するための別荘「萬松園」(現在は迎賓館サクラヒルズ川上別荘「萬松園」)があります。いずれも木曾川中流域の河畔に建てており、たいへん美しい建物で、貞照寺は国の登録有形文化財、萬松園は国指定重要文化財となっています。

本稿では、市民文化活動や生涯学習のひとつの事例として、また、兵庫県や自然、SDGs など、一見関係なさそうであっても実は見えないつながりを拾い出せることや、新型コロナ禍での取り組みのあり方を紹介します。



写真1. 成田山貞照寺 (各務原鵜沼宝積寺)

### ■喫茶店で生まれた市民オペラ～創作オペラ「貞奴」プロジェクト～

創作オペラ「貞奴」プロジェクトは、各務原市内の「ブーケガルニ」という喫茶店に集まっていた音楽仲間の雑談の中から始まりました。中心となったのが、地元根を下ろし、生涯学習分野でも貢献しているソプラノ歌手の金光順子(当団体代表。写真2)であり、店主の今井俊一(同副代表。初代事務局長)です。メンバーの人脈をたどり、作曲は、名古屋波の会の菰田尚子先生にお願いでき、以来、今作まで継続しています。第1作の「青嵐編」は2011年4月24日に初演でした(写真3)。制作過程で、貞奴さんに関する勉強や資料集め、見学なども行い、貞照寺での貞奴忌(12月7日)等の奉納コンサートも始まりました。



写真2. 金光順子(貞奴)と岡部敬太郎(音二郎。新作では桃介を演じる)

その2年後に、第1作では満足できなかったことを反映させ、第2作となる完結編を2013年11月17日に新作として初演(写真4)し、以後、この完結編をベースとして展開しています。オペラは総合芸術でなかなか本格的な上演をすることは難しく、歌曲による部分的なコンサート、生涯学習の講座、貞奴さんに関連した市民活動の盛んな神奈川県茅ヶ崎市での招待ミニ公演、貞照寺の奉納コンサートなどの活動が継続されてきましたが、2019年9月29日に、各務原市の文化会館に「市民チャレンジ応援企画事業 TUNAGU」ができ、共催としてゲネプロと本番の会場費の負担をしていただけることになり、三度目の上演を、前2回よりは小さいホールにて行い、チケットは早々に完売となりました(写真5)。



写真3. 第1回青嵐編プログラム  
2011年4月24日初演



写真4. 第2回完結編チラシ  
2013年11月17日初演



写真5. 完結編のダイジェスト版となる第3回のチラシ ~悠久の木曾川わたしは紅葉。最後に選んだのはこの大地~ 2019年9月29日上演



■グローバルに活躍した近代日本初の女優・川上貞奴という女性と、その転機



写真6. 川上貞奴 (画像提供: 迎賓館サクラヒルズ川上別荘「萬松園」・川上新一郎)

川上貞奴は、明治4年7月18日(天保暦。明治5年12月2日まで使用された現在のグレゴリオ暦では9月2日にあたる)に、日本橋の両替商越後屋を営む小山家に生まれました。7歳で、芳町の芸者置屋浜田屋亀吉の養女となります。才色兼備で芳町随一の芸妓として成長し、時の総理大臣・伊藤博文らに最厚にされます。

23歳の時、オッペケペー節や板垣君遭難実記(板垣退助が岐阜で刺傷した事件を題材にした芝居)で大人気だった川上音二郎と結婚し芸者を引退します。音二郎は破天荒な性格で、劇場を建てたり、選挙に出たりしますがうまく行かず、二人は小舟で海に逃げ出します。



写真7. 1900年発行のフランスの演劇雑誌『ル・テートル』の表紙となった川上貞奴 (画像提供: 貞照寺・各務原市文化財課)



写真8. 1903年に日本で上演された『ハムレット』でオフィーリアを演じる川上貞奴 (画像提供: 貞照寺・各務原市文化財課)

この航海で迎っていたのが神戸で、体を壊した音二郎は、神戸での療養中に日系アメリカ人の実業家、榎引弓人(くしびき・ゆみんど)にアメリカでの興行に誘われ、川上一座を率いてゲーリック号で渡米します。貞奴は川上音二郎の妻として一座を支える女将でしたが、西洋では、日本で慣例となっている男性が女性役を演じる女形は受け入れられず、「女優」でなければいけないと口説かれ、舞台にあがることになるのです。しかし、到着したサンフランシスコでの公演中に売上金を持ち逃げされ、ホテルを追い出されてしまいます。その後、野宿したり、日系人社会に助けられたり、十分な食事もなかったりしながらも、東海岸をめざし、しだいに人気を得ていきます。



写真9. 川上音二郎と貞奴 (画像提供: 貞照寺・各務原市文化財課)



写真10. 福澤桃介と貞奴 (画像提供: 貞照寺・各務原市文化財課)

やがて、西洋における日本ブームや日本公使の小村寿太郎の後押しもあり、音二郎の興行師としてのセンスも開花して、ボストン・ワシントン・ニューヨークでは大成功を収めます。その後、イギリスに渡り、そこでパリを拠点に活躍する当代随一のダンサー&プロデューサーのロイ・フラーと出会います。彼女の誘いにより、1900年のパリ万博会場内に建設された彼女の劇場で公演し、ヨーロッパの社交界の花となるのです。ロイ・フラーは王族、ロダンやピカソなどの芸術家、キュリー夫人やエジソンなどの科学者など交友関係も広く、特に、ロイ・フラーの照明を浴びることで輝きを増していくダンスや舞台芸術、女性がプロデュースする姿には、貞奴も少なからぬ影響を受けたことでしょう。彼女とともに

に西欧各国で巡演し、**マダム貞奴**として名声を博していったのです。

日本に戻ってからの川上一座は、西洋の演劇を取り入れた自分たちの演劇を「**正劇**」と名付けて、**シェイクスピア**の『オセロ』『ハムレット』などの翻案ものを上演していきます。やがて大阪に大阪帝国座を建設しますが、音二郎はその翌年、47歳で早逝してしまいます。貞奴は借金を抱えることになり、未亡人が一座を率いていくことに対する風当たりもきつく、座員などものはなれていく逆境の中で7年間の音二郎追善興行を展開します。それを援助したのが福澤諭吉の娘婿である**福澤桃介**(旧姓:岩崎)でした。桃介は、貞奴が音二郎とともに開所した帝国女優養成所の開所式にも渋沢栄一らとともに立ち会うなど、音二郎の生前から交友があり、貞奴にとってはまだ一人前の芸妓になる前の初恋の相手でもありました。音二郎は亡くなる前に桃介に貞奴のことを頼んだという説もあります。いずれにしても、貞奴は、桃介のバックアップを得て7年間という長期にわたる追善興行を行い、最後に『アイダ』で女優を引退します。その途中、神戸で『蝶々夫人』(オペラではなく戯曲版)を演じますが、オペラ作曲者のプッチーニは蝶々夫人の構想中に貞奴にわざわざ会いに出向いたと言う思い出の作品です。『蝶々夫人』が神戸で上演された頃、兵庫県の龍野での桃介と貞奴の様子がゴシップ的に人々に知れ渡ることになりました。福澤桃介は諭吉の婿養子であり、株取引で成功し(相場師と揶揄されたり、成金とも言われていたりしたようです)、実業家としても成功していましたから、二人の親密さは、「龍野の醜聞」としてたいへんよく知れ渡っていたようです。しかし、その後のふたりの木曾川での水力発電事業のことを考えると、お互いによく知る間柄であったからこそ、ビジネス的にも強固なパートナーシップができつつあったように感じられます。貞奴は、その頃から、次の人生のステージへと向かい始めていたのではないかと推察できそうです。

### ■100年前の桃介と貞奴による木曾川での水力発電事業 —ドラマチック木曾川—

木曾川は水量も多く、急こう配で、水力発電を行うのに適した川でした。桃介は、「一河川一会社」として、木曾川本流に7つの水力発電所(図1)を造ることを考えました。日本には尽きることのない川の水を利用した水力発電が適していることを最初に提起したのは福澤諭吉で、「学問のすすめ」だけではなく、こういった着眼も先見の明といえるでしょう(大井ダムには、福澤諭吉と「独立自尊」のレリーフがあります)。



図1. 福澤桃介による木曾川の7つの水力発電所 (国土地理院地図をもとに作図)

発電所の建設は大工事ですから、西欧諸国からの最新の技術、政財界との関係作りなどの必要から、桃介は世界を知り、人々を「魅了する」ということを知り、人的ネットワークの豊富で自らの理解者でもある貞奴をパートナーとして望んだのではないかと、思われます。

**島崎広助**を木曾16町村の代表とする、地元での反対運動もありました。広助は島崎藤村の兄であり、幕府の直轄林だった木曾の山々が、明治維新後も天皇の御料林として伐採の制限がきつくかかった山々に対して政府より多額の補償金を引き出し、解決に導いた人物です。広助もまた、木曾川の水力発電については考えていましたが、実現しませんでした。水利権の問題として反対運動の先頭に立ちますが、木材を川に流す運搬方法(川狩り)の代わりに森林鉄道を敷設すること、発電所工事などにより生み出される産業と雇用、木曾の町村から広助に支払われる手数料の問題などによって、切り崩されていきました。

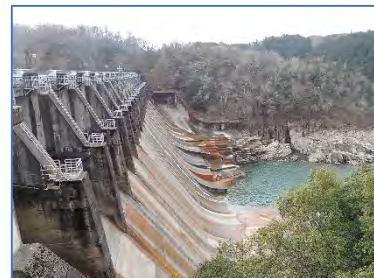


写真11. 大井ダム。写真の左に恵那峡、右下に発電所がある。

木曾川の発電所はその美しさもすばらしいものがあります。それぞれの地形に合わせて、それぞれ違うスタイルで建造されています。最大の工事は、恵那峡を生み出した50mを超えるハイダムを伴う**大井発電所**でしょう。恵那峡を遊覧船で回ると花崗岩の奇岩を楽しむことができます。**大井ダム**(写真11)の建造は、景勝地を作り出し産業を生み出した側面もあります。そしてダムの姿は、機能的に計算されていながらも、まるでドレスの裾のようにも見え、その下端は自然の岩々とゆるやかに融合していくかのようです。天端の電灯や手すりの優雅さと合わせて、巨大かつ優美な印象です。

以下の写真は建設当時のものです。関東大震災後の金融の混乱による資金調達難を外債発行で乗り切



り、洪水による被害も乗り越えて完成しました。貞奴は、ひるむ重役を尻目に桃介とともにゴンドラに乗り込み、工事現場へも下りていったと言います。**巨大な土木工事に女性が大きく関わったもの**として初期の事例ではないでしょうか。現在これらの木曾川の発電所は**関西電力**に引き継がれています。



写真 12~19. 大井ダム建造工事の様子 (画像提供: 土木学会附属土木図書館)

### ■新型コロナ禍における

#### 「ドラマチック木曾川—Opera 貞奴—」の制作

2021年は川上貞奴女史の生誕150周年。それに因んで各務原市民が中心となって制作する新作の「オペラ貞奴」は三つの「ドラマ」を意識しています。

- (1) 日本初の国際女優・川上貞奴が演じた「ドラマ」
- (2) 貞奴と、その生涯のパートナー・福澤桃介が木曾川で繰り広げた水力発電の「ドラマ」
- (3) 貞奴や木曾川をめぐり、今を生きる私たちが創り上げようとする新たな「ドラマ」

特に(3)については、川上貞奴を取り上げる以上、貞奴の生き方をレスpektするようなチャレンジングで前向きな取組みをしなければなりません。新型コロナウイルス感染症対策の制限がかかる中でも、下記のようなできる限りの対策をして、貞奴に顔上げられるような活動をしていきます。

- ・長時間にわたるオンラインでの打ち合わせと、小さな集まり、短時間活動のブレンディング
- ・他団体との協働→合唱サークル、民謡サークル、キッズダンスサークル等
- ・歌唱用マスク、アルコール等の消毒、非接触型検温計等の購入
- ・合唱練習用CDの制作による、多人数で集まって練習する時間の削減  
→制作過程で若手アーティストたちに連帯感が生まれる副次的な効果
- ・他地域とのオンラインによる交流・連携の促進(今回の発表もその一つ)  
→外からの発信により自分たちの活動が見え、体験共有でコミュニケーションが活性化しました。
- ・ステージはインターネットでの配信を予定→各務原 全国まちおこし映画祭実行委員会との連携
- ・チームドクターの依頼→抗原検査を導入し、関係者の健康を守りクラスターを未然に防ぎます。

今回、目標を早期に共有するため、ドラマチック木曾川のマークを早々に制作していただきました。その旗の下に、「次世代(若手)に歌い継ぎ」(写真21,21)、しかも歌うだけでなく「貞奴を好きになってくれる人に仲間になって」もらい、さらに多方面からの仕掛けづくりで「様々な立場の方々と協力」して、よりよい生誕150周年記念事業にしていきたいと思ひます。SDGsという言葉もない100年前の事業をあらためて見直してみると、いろいろな発見があり驚かされます。貞奴とその時代を学び、再発見していくこと、オペラという音楽作品を創り上げることの両方に邁進していきたいと思ひますので、応援をよろしくお願ひいたします。**2022年1月23日(日)初演!**



写真 20. 大井ダム工事関係者。最前列に貞奴、その左隣に桃介 (画像提供: 土木学会附属土木図書館)



写真 21, 22. 安藤風季(若き日の貞奴)と上田賢(2代目音二郎&広助)

